

橋本初次郎先生を追悼して

日本顕微鏡学会の名誉会員である橋本初次郎先生が、2017年4月15日に95歳で逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

先生は、1921年12月に滋賀でお生まれになり、1945年9月に広島文理科大学（現広島大学）理学科をご卒業になりました。在学中に広島に投下された原子爆弾に被爆されながらも、九死に一生を得たその命を、天寿を全うするまで研究と教育に捧げられました。先生は、終戦直後の物資のない中において、砲弾の筒や真鍮材料を集めて手作りで電子回折装置をお作りになり、研究をスタートされました。新しい装置からしか新しい現象を見つけ出すことはできないとの信念からでした。自作した装置で明るく輝く電子ビームを見て、「これが私の電子だ!」と感動して叫ばれたというご様子が、私の目にも浮かんでくるようです。先生は、その後引き続き、電子顕微鏡像と電子回折パターンが一つの装置で観察できる新しい装置の必要性を感じになり、Boershのアイデアをもとに「万能電子回折顕微鏡」を独自に開発され、戦後間もない時期の日本の電子顕微鏡技術を世界と肩を並べるレベルにまで引き上げられました。1950年からは京都工芸繊維大学に、1972年からは大阪大学に、そして1985年から2001年までは岡山理科大学に奉職され、半世紀以上にわたり研究と教育に心血を注がれました。この間、世界各国の研究者と共同研究も実施され、企業との共同開発も積極的にお進めになり、電子顕微鏡学の発展と電子顕微鏡関連産業の育成にご尽力されました。

先生の代表のご業績として、

モアレパターンによる格子欠陥の観察

ガス反応室の開発による環境電子顕微鏡の先駆的研究
動力学的電子回折による異常透過と異常吸収現象の発見
暗視野照明法による単原子像の観察

原子レベル動的観察技術の確立と原子直視分析電子顕微鏡の開発

エネルギーフィルタード・イメージング法の開発

等が挙げられます。どれ一つをとっても世界に先駆けた独創的なお仕事であり、物作りの精神に立脚した先生の研究に対する執念を示すものでありました。これらのご業績により、1960年と1972年に日本電子顕微鏡学会賞を、1981年には応用物理学会賞、1988年には米国電子顕微鏡学会から功績顕著科学者賞、1995年に本多記念賞を受賞されています。また、1984年には紫綬褒章、1992年には勲二等瑞宝章を受章されています。

私達門下生は、これらの独創的な最先端の研究の進展に直接触れる幸運に恵まれ、弛まず考え続けることで真実を見抜く研究の基本姿勢をご指導頂き、それと同時に研究の面白さを経験させて頂きました。それらの経験がその後の私たちの人生に大きな影響を与えたことは、言を俟ちません。



また、先生は1978年に日本電子顕微鏡学会の第27代会長をお務めになり、1982年からの4年間は、国際電子顕微鏡学連合の第9代会長としての重責を果たされました。会長在任期間中には、中国をはじめ諸外国における電子顕微鏡学の振興にも尽力されました。特に、約20年の間継続された日中セミナーは中国の若手研究者の育成に大きく貢献しました。また、中国の電子顕微鏡学会の設立と国際電子顕微鏡学連合への加入に向けて発揮された先生のリーダーシップは、中国の先生方から厚い信頼を得ることとなり、中国電子顕微鏡学会に「橋本初次郎賞」が創設されました。また、これまでの永年のご業績とご功績により、2014年度から国際顕微鏡学会に“Hatsujiro Hashimoto Medal”が創設されましたことは、顕微鏡学を目指す私たちの大きな誇りとするところであります。

思い返せば、私たちは先生からたくさんの思い出を頂きました。先生は絵を描くのがお好きで、気持ちの趣くまによくスケッチブックをお開きになり写生を始められました。先生からスケッチ入りの年賀状をお受け取りになった皆様もたくさんいらっしゃると思います。また石を集めるのがお好きで、はるばる中国から重い石を持ち帰ることになった門下生もいらっしゃいます。奥様も「このままでは家が傾いてしまう」とよく嘆いておられました。先生が数え年で90歳の誕生日をお迎える頃、卒寿をお祝いする会を開かせて頂こうとご相談しましたところ、先生から「90歳というと皆さんが高齢だということで心配するだろうし、それに何よりも私はいつまでも現役でいたいので、“卒寿”というのは勘弁してくれませんか?」とおっしゃいました。そこで“御長寿をお祝いする会”に改めさせて頂いたことがあります。お祝いの会の当日、先生は門下生への挨拶の原稿を朝方までご準備され、そのため会場に少し遅れて駆けつけられることとなりました。門下生が見守る暖かい視線の中で、深々と一礼された先生の謙虚なお姿が今も忘れられません。

最後に、先生のお部屋の黒板に、いつも消さずに残されていた言葉を紹介してお別れの言葉にさせていただきます。

“Never say, it is too difficult for me. Try and try again !”

先生、安らかにお休み下さい。先生が残された精神は、私達門下生が引き継いでいきます。

高井義造（大阪大学）